

青梅市文化財ニュース

第387号

令和2年1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

ダルマ

ダルマは、商売繁盛、合格祈願、無病息災、家内安全等々の開運の縁起物として、家々で飾られています。

多摩地域では、幕末から明治にかけて、養蚕が盛んになるとともに、ダルマの人気も出てきました。

当時、養蚕を行う家々では、買ったダルマに片目を入れることで、繭がたくさん取れるように願いをかけたのでした。



多摩地域で作られるのは、多摩ダルマ（東京ダルマ）といわれています。

多摩ダルマは、顔が白く、^{まゆ}眉、^{ひげ}髭の描写が簡素であり、目にアクセントをつけるために、目の縁に^{くま}隈を加えたとのことです。他地域のとは異なった特徴をもっています。各家で顔の造りが微妙に違ってきます。

青梅の藤野和浩さん（故人）談によると、多摩ダルマは次のようにして作るそうです。

- ① 木型 松で作る。これは一度作っておけば何年でも使えるそうです。
- ② 下貼り 木型に下張用紙を水張りする。
- ③ 上貼り ②の上に上質用紙を糊で張る。
- ④ 型抜き 乾いた所で、後、前、底を切り、中の木型を取り出し和紙でふさぐ。
- ⑤ シッタ（底） 泥とワラで底を作り、白い胡粉とニカワを混ぜたものをつける。塗る時に棒を通すため、底に穴をあける。
- ⑥ 胡粉塗 胡粉とニカワを混ぜたものを湯でとき、一回塗る。
- ⑦ 赤塗り 乾かして、赤色の紅粉を二回塗る。
- ⑧ 面相 白の縁取りをして、顔を書く。眼縁をぼかし、白の眼を書き、墨

汁で目を書く。目の回りにニカワを塗って、その上から金粉をつける。赤い部分にシンナーと金粉を混ぜたものでひだを書き仕上げる。

藤野家の初代は、大正時代頃からダルマを作り、現在、和浩氏の息子さんの智幸さんが三代目を継いでいます。

ダルマは、9月の終わり頃から作り始め、12月で作り終えるということです。

現在は、拝島大師（1月2・3日）、青梅市沢井の薬師様（青梅ダルマ市の1週間前の日曜日かその近くの日）、青梅ダルマ市（1月12日）の3か所のみ出しているとのこと。

現在、下張り材料を作っているところは無く、山梨県身延山の方で、古紙を再生して泥を入れて溶かしたものを作ってもらい、あきる野市の同業者が共同で購入したものを分けてもらっているとのこと。昔は埼玉県の小川町で作っていたそうです。

現在ダルマを作っているのは、瑞穂町に5軒、あきる野市に1軒、立川市に1軒、青梅市に1軒で、全部で8軒です。昔は、市内の成木地区でも作っていたという話を聞いたことがあります。

今では、ダルマを飾る家がだんだん少なくなっていますが、毎年行われるダルマ市には、多くの人々でにぎわい、昔からの伝統行事として続いています。

お話を伺った方：藤野智幸氏

（文責 東山 啓子）